

「もう来ないかと思ったよ」

一度襲われてから、
毎夜のように洞窟を訪れていた
第二王子。

だが、この一ヶ月は
姿を見せていなかった。

「兄さんの葬儀とか
太子の継承とか
色々あって……」

「おや、兄さんが死んだのかい？」



「まあ、私には関係ないけどね。」

早く出すもの出さないよ」

「あっ、今日はしなくていいよ……」

だが王子の言葉を遮るようにつ
ズボンとパンツはズリ下げられてしまっ

「あっは！ 出たあ」

むき出しになった王子の股間を見て
玩具を見つけた子供のよう
嬉しそうな顔をする蛇女。

「すぐ天国見せてやるよ」



皮に包まれた王子の先端を舌先でほじくり、
ジワジワと皮の内側に侵入して内部までを舐め回す。

舌の動きに合わせて
まだ柔らかいままの肉の塊が
ブルンブルンと揺れ動く。

「あぁっ」

舌から逃げるように動く棒を
追いかけてながら、何度も舌の先端で
ペシペシと叩く。

王子の腰がビクビク震え始めると、
舌に苛められている真っ最中の亀頭が
真っ赤に充血し始める。



「はあ……はあ……あああ——……」

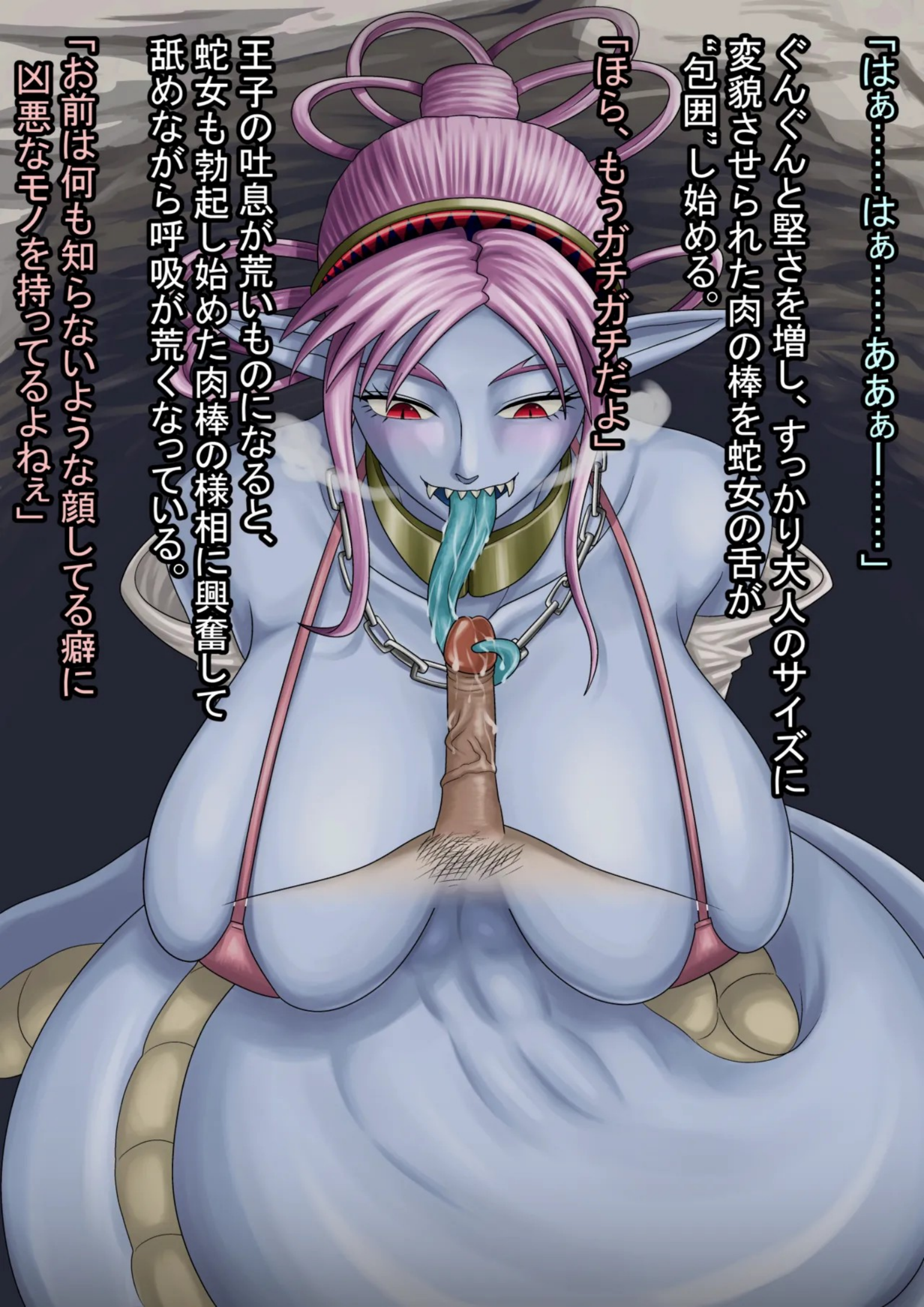
ぐんぐんと堅さを増し、すっかり大人のサイズに変貌させられた肉の棒を蛇女の舌が包囲し始める。

「ほら、もうガチガチだよ」

王子の吐息が荒いものになると、蛇女も勃起し始めた肉棒の様相に興奮して舐めながら呼吸が荒くなっている。

「お前は何も知らないような顔してる癖に

凶悪なモノを持ってやるよねえ」



蛇女はいつものように、長い舌を使って
王子のモノを拘束していく。

「くああああつ……………」

この「巻き付き運動」を繰り返されるだけで
簡単に果ててしまう。

「まだイクんじやないよ、限界まで我慢した方が
たっぷり出るからね」

「ううう……………はあつ……………はあつ」

陰茎、裏筋、カリ、亀頭、尿道と
あらゆる部位を一度に舐めまくられ、
王子は既に限界を迎えそうになっている。



ぬるるるっ！ じゅるるっ！ べろおっ！ズリズリッ！
舌の巻き付きが激しくなり、淫靡な音が洞窟内に響く。

「あっ……あぐっ！ は……はあっ……！ はあっ……！」

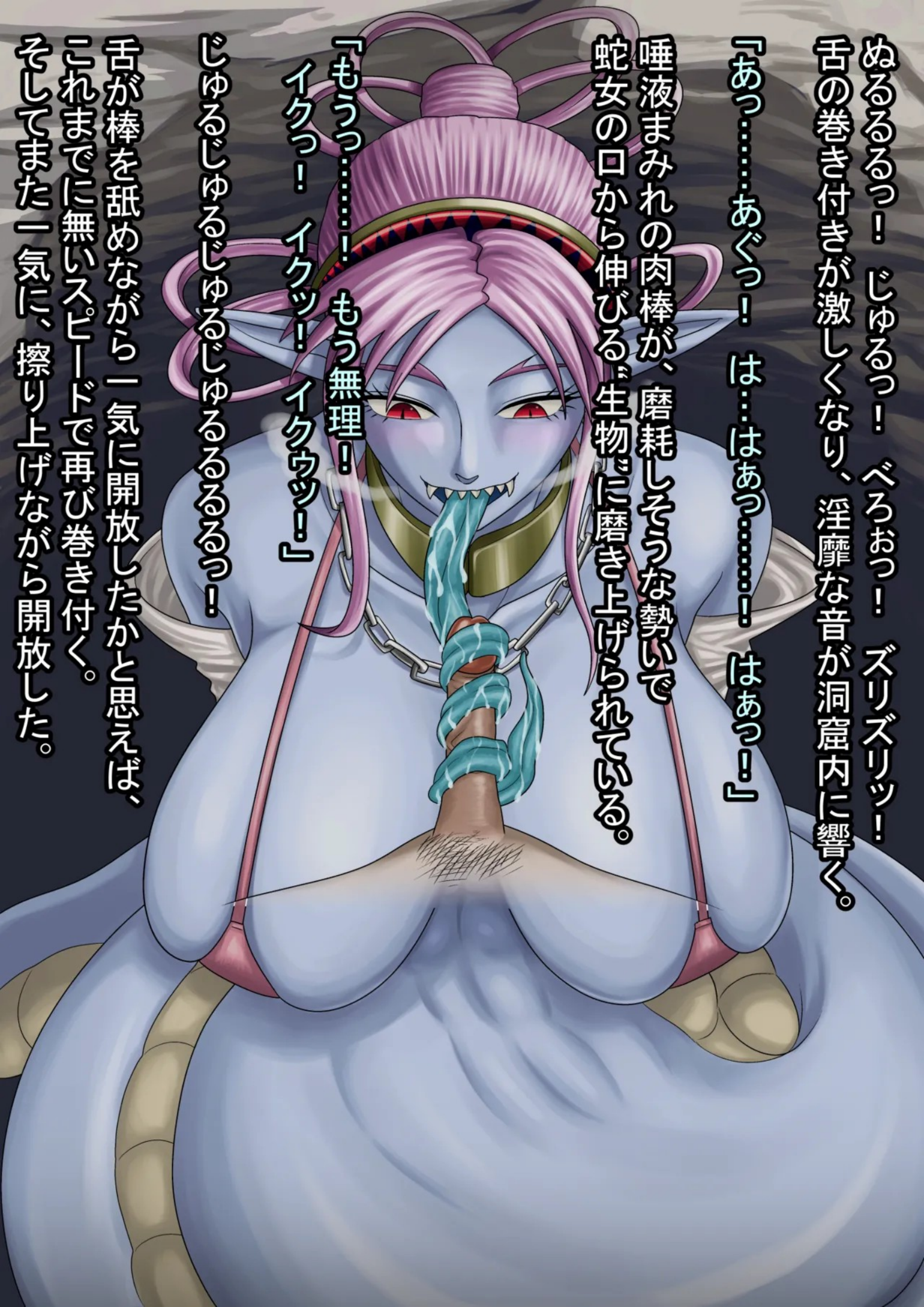
唾液まみれの肉棒が、磨耗しそうな勢いで
蛇女の口から伸びる。生物に磨き上げられている。

「もうっ……！ もう無理！」

イクッ！ イクッ！ イクウッ！」

じゅるじゅるじゅるじゅるるるるっ！

舌が棒を舐めながら一気に開放したかと思えば、
これまでに無いスピードで再び巻き付く。
そしてまた一気に、擦り上げながら開放した。



「あっああああっ……あああああーっ!!」

王子の上半身が後ろに倒れそうになぐらひ反り返ると、舌に包まれたままの棒の先端からロケットのような勢いで精液が発射された。

「うあっ!! あっああっ!! あっうっ!! はああっ!!」

細長い精液が「っ」「っ」と放出される度に王子の全身が弓なりにビクンビクンと跳ね回る。

発射してる間も蛇女の舌は容赦せず

肉棒の上から下まで隅々を這いずり回っていた。

「はあ……はあ……ああああ………」

「くく……すっぴい出たね、溜まってた?」

ちゅばちゅばど中に残った精子まで吸い出されると、
ようやく王子の下半身は開放された。

「兄さんが死んでも、イク時はイクもんだねえ」

「兄さんが僕を殺そうとしたから……
護衛が僕を守るうとして」

「弁解しなくてもいいんだよ、私には関係の無い話だ。

それより一回で満足なのかい?」



ずずずずっ！

「んぶっー！」

王子は突然、相手の許可も得ずに
精液まみれのペニスを蛇女の口の中に押し込んだ。

「はあああ……」

気持ちいい」

肉棒の先端だけが、温かいぬるま湯に浸かっているような
心地よさに包まれている。

「んぶぶぶ」

突然突っ込まれたにも拘わらず、蛇女は少しも怯む事なく
自分に突き立てられた棒を、口の中でベロンベロンと転がす。

「あっあっ凄い！ ギスさんの口の中！」

あまりの快感から、思わず蛇女の名前が出る。1ヶ月前、完全に虜となっていて通いつめていた時に名前だけ教えて貰っていた。

「んんん、口の中が精子臭い」

先端を口に含んだまま喋られるだけで、龟头が唇に潰され、ムズムズとした複雑な感触に襲われる。更に、口に僅かに空いた隙間から舌を出して裏筋を舐められ、一気に射精感がこみ上げて来た。

「はああああ……口の中でぐちゃぐちゃにされてる。

おかしくなりそうだよお」

じゅるるるっ！ じゅるるるるっ！

「くああああっ！ 抜けない！ 口から抜けない！」

引き抜こうとすると、蛇女が不機嫌そうな目を見せて舌をカリに引っ掛け、先端を吸引して口内に引き戻そうとする。

ぬもおおおっ……

舌全体を使って陰茎から亀頭の周りの滑らせて摩擦を加えながら、舌先でツンツンとくすぐる。

「あーっ！ あーっ！」

自分から蛇女の口に突っ込んだはずの王子が自由を奪われ、犯されている。

限界まで堪えていた王子だったが

電流のような衝撃が全身を駆け抜けると

強い熱を帯びた液体が蛇女の口内に勢い良く放出された。

びゅーっ！ びゅっ！ びゅびゅびゅっ！ びゅんっ！

「あっぐあああーっ！ うああああーっ！！」

「んっ……んんっ……」

口の中で激しく跳ね回る性器の先端からは、10回、15回、20回と、
かなりの長時間に渡り精液の放出が続いている。

「ああああーっ！ イッてる！ もうイッてるっ！」

それでも、彼女はスライドを止めない。



「ふはあ……」

長い長い躍動がようやく収まると、蛇女は動きを止めて口の中に溜まった精液をゴクツと飲み込んだ。

彼女の顔は、額から口の周りまでベツトリと白液に汚染されている。自慰行為だったら、5回は射精しなければ出せない程の量だ。

「あああ……はあ……はああ……」

王子は、未だ続く快感の波に耐えている。囚われた肉の棒は、射精が終わった後も開放される事はなく、精液まみれの舌になぶられ続けている。

「あああ……ギスさん……」

「クク……まだ勃ってるねえ」

立て続けに射精させられ、真っ赤に充血しながらも
軟化の気配を見せない肉の棒を、蛇女は巨大な胸の肉で
左右から挟み込んだ。

「うわあ……」

谷間から頭だけを見せている自分の息子の姿が
なんとも情けない。

「お前にしてやるのは初めてだったねえ」

既にこの世にいない兄に対して「こんな事をされていたのか」
という嫉妬のような感情が湧き上がる。



びゅららららーっ！ びゅびゅっ！ びゅらびゅらーっ！

激しく上下する山の中央から、3度目とは思えない量の精液が四方八方にぶちまけられた。

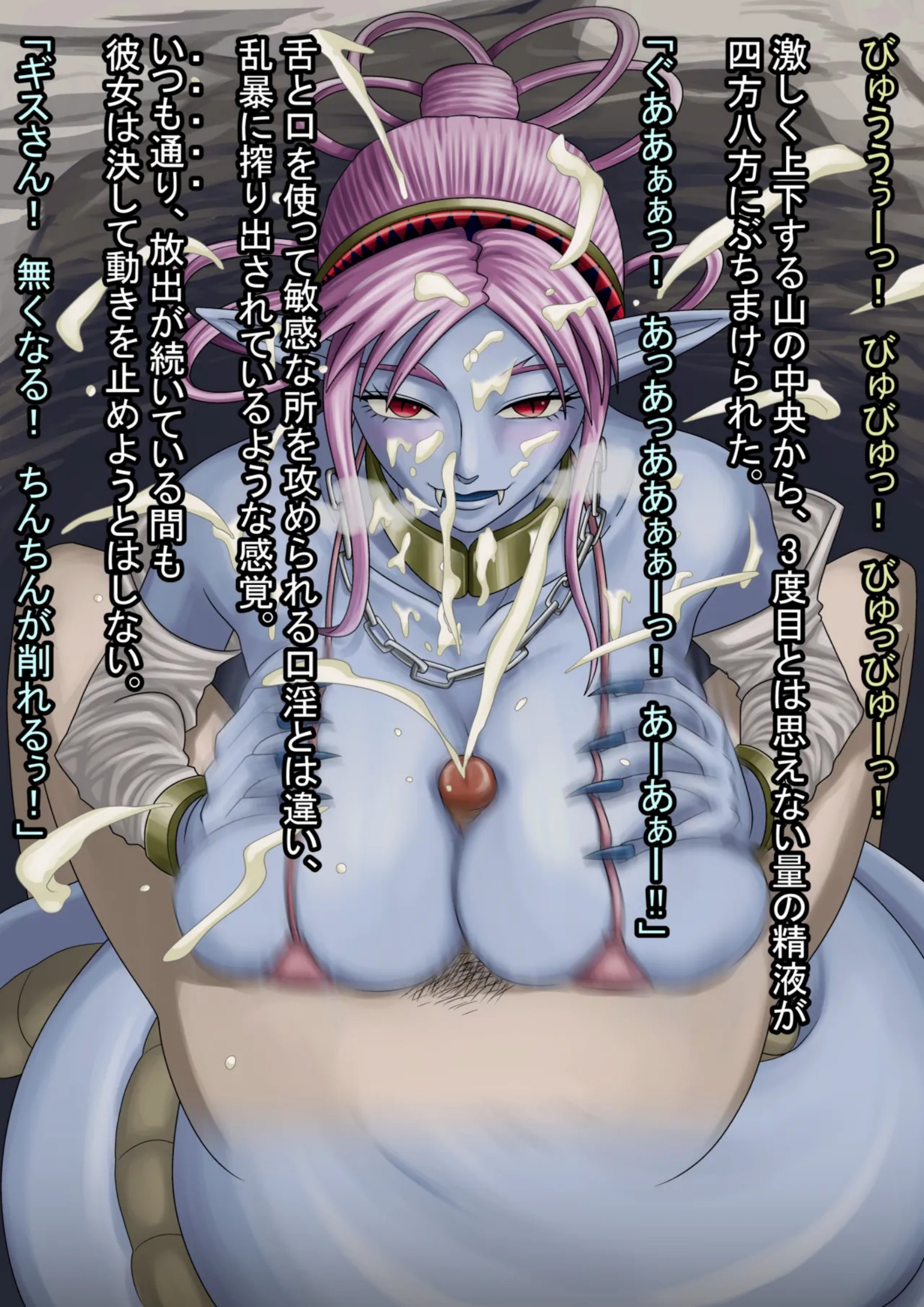
「ぐああああっ！ あっあっあああーっ！ あーああー！！」

舌と口を使って敏感な所を攻められる口淫とは違い、乱暴に搾り出されているような感覚。

いっつも通り、放出が続いている間も

彼女は決して動きを止めようとはしない。

「ギスさん！ 無くなる！ ちんちんが削れるうーっ！」



「クク……この小さい体の一体ど……」
「こんなに大量の精子が詰まってるんだらうねえ？」

髪から顔から胸に至るまで、彼女の上半身は王子の子種で真っ白に塗り潰されている。

「ああああ……あああ……」

谷間に挟まれたまま、自分の精液の海に沈んだ肉棒は別の生き物のように、ビクビクと上下運動を繰り返している。

「まだまだ、10回は抜いてやるからね、ほらおいで……」

今回は報告だけという初期の目的を忘れ、

王子は今夜も彼女が作り出す肉欲の沼に溺れて行った。





































